

# 戦国大名の「法度」と分国法：中国の法典と比較して

菅原, 正子 / Sugawara, Masako

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / 経済志林

(巻 / Volume)

80

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

77

(終了ページ / End Page)

97

(発行年 / Year)

2013-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008630>

# 戦国大名の「法度」と分国法

## —中国の法典と比較して—

菅 原 正 子

### I. はじめに

戦国大名の分国法は、領国の支配・統治のために作られた法であり<sup>1)</sup>、領国民を規制対象とする「領主の法」で<sup>2)</sup>、戦国大名の公権力（独立の国家権力）の成立を示すものとされてきた<sup>3)</sup>。しかし、笠松宏至氏<sup>4)</sup>は、中世の法の効力は近現代ほど絶対的・継続的ではなかったとしており、分国法の効力に対して過大に評価する傾向が従来あったと思われる。また、分国法の意義・役割については、大名の権力意志の発動としての法（勝俣鎮夫氏）<sup>5)</sup>のほかに、家臣たちの共通利益の保護者としての大名の側面（河合正治氏）<sup>6)</sup>、在地領主層の共通課題の解決（藤木久志氏）<sup>7)</sup>、という評価も存在

1) 勝俣鎮夫「戦国法」（同『戦国法成立史論』）、藤木久志「戦国法の形成過程」（同『戦国社会史論』）、浅古弘他編『日本法制史』第3編第2章「戦国大名の法」、河野恵一「「分国法」の比較研究」等。

2) 佐藤進一・池内義資・百瀬今朝雄編『中世法制史料集 第3巻武家家法Ⅰ』「解題」。なお、水林彪他編『新体系日本史2 法社会史Ⅱ』中世5章「中世から近世へ」（新田一郎）では、領国内の人々は法の直接の受け取り手ではなく、統治作用の客体となることによって間接的に分国法を体験したことを指摘している。

3) 『中世政治社会思想 上』「解説」（石母田正）。

4) 笠松宏至「中世法の特徴」（同『日本中世法史論』）。

5) 勝俣注1）論文。

6) 河合正治「戦国武士の教養と宗教」（同『中世武家社会の研究』）。

7) 藤木注1）論文。

する。

筆者は、これまで大名の法とされてきた戦国期の史料にみえる「国法」が、実は在地社会の慣習・決まりごとであったことを指摘した<sup>8)</sup>。戦国大名の支配のための法とされてきた「国法」の解釈を修正する以上、分国法の位置付けについても再検討する必要がある。

また分国法では、後述するように、自らの法のことを「法度」と称している場合が多い。その後「法度」は江戸幕府が「武家諸法度」等の法令名に用いている。この「法度」は元来中国から来た言葉であり、中国では古代から現代に至るまで法律を意味する言葉として用いている。この日中の「法度」の相違点についても追究する必要がある。

本稿では、分国法の制定の目的を明らかにして法典としての位置付けを再考するために、まず日本と中国のそれぞれの「法度」について考察し、分国法と同時代の明が編纂した法典（「明律」「明令」「大誥」「問刑条例」）のあり方と分国法を比較することによって、分国法の性質を浮き彫りにすることを試みたい。地方権力の法典を大国家の法典と比較することには、規模のレベルの違いなど問題点も存在するが、政治的な支配の性質を考える上では参考になり有意義である。そして、戦国大名の分国法制定の理由を分国法の記述自体から読み取って明らかにする。また、伊達植宗制定の『塵芥集』と武田晴信（信玄）制定の『甲州法度之次第』のそれぞれの独自性を考察し、それらと制定の理由との関係についても考える。

## Ⅱ. 分国法と中国の「法度」

分国法は文書の形で公布した成文法である。これに対し長年慣例として行なわれてきて成文法と同じ効力を持つ慣習法は、中世では「法」「大法」「先規」「先例」「傍例」「法例」等の言葉で表現されている<sup>9)</sup>。また、従来、

8) 拙稿「戦国大名と「国法」―武田・北条氏領国の場合―」、同「武田信玄領国の法体系」。

9) 中田薫「大法」。

表1 戦国大名の分国法と自称

分国法	成立年	制定者	領国	条数※	分国法の自称
大内氏掟書	1439～1529	大内持世～義隆	周防	〔181〕	法度
相良氏法度	1493	相良為続	肥後	7	条々
	1518以前	相良長毎	肥後	13	
	1555	相良晴広	肥後	21	条々
今川仮名目録	1526	今川氏親	駿河	33	法度, 条目
仮名目録追加	1553	今川義元	駿河	21	法度, 条目, 制法
塵芥集	1536	伊達植宗	陸奥	171	法度, 法令
甲州法度之次第	1547	武田晴信	甲斐	(26) 55	法度
結城氏新法度	1556	結城政勝	下総	104	法度, 掟
六角氏式目	1567	六角義賢・義治	近江	67	法度
新加制式	1558～70頃	三好氏	阿波	22	
長宗我部氏掟書	1596	長宗我部元親・盛親	土佐	100	

※条数には追加の法を含めていない。〔 〕は単発の法令。『甲州法度之次第』は26箇条本もある。

戦国大名が制定した法と捉えられてきた「国法」について、拙稿<sup>10)</sup>で在地社会である「くに」<sup>11)</sup>の「法」（慣習・決まりごと）<sup>12)</sup>であると解釈し、「国法」は在地社会の慣習・決まりごとであることを指摘した。「国法」も慣習法に含まれることになる。

それでは分国法は自らの法典・法令のことを何と自称していたのか、各分国法から自称を抽出して表1にまとめた。分国法では多くの場合、「法度」と自称している。

今川義元制定の『仮名目録追加』<sup>13)</sup>では、第19条で次のように自称している。

10) 拙稿注8)論文。

11) 池享「戦国期の「国」について」(同『戦国期の地域社会と権力』)で、元来「くに」は生活空間の「国」であったとしている。なお戦国大名は、分国法や古文書では自国のことを「分国」と称している場合が多い。

12) 『日本国語大辞典 第2版 第11巻』で、「法」の意味の一つとして中世における生活規範を挙げている。

13) 『中世法制史料集 第3巻武家家法Ⅰ』。『中世政治社会思想 上』も参照。

一、諸事法度を定、申付と云共、各用捨あるゆへ、事をぬしになり申出者なきハ、各の私曲也。制法にをいてハ、親疎を不論、訴申事忠節也。自今以後、用捨をかへり見す申出に付てハ、可加扶助也。

これは、今川氏が制定した法令に関する事柄について遠慮なく訴えよ、と定めているもので、ここでは今川氏が制定した法のことを「法度」「制法」と呼んでいる。

また、『塵芥集』<sup>14)</sup>の第80条には、「百しやうゆうしよのさいけをしさり、<sup>(他領)</sup>たりやうにして、<sup>(出作)</sup>いてつくりいたす事、かつてもつて<sup>(禁制)</sup>きんせゐたるへし。此<sup>(法度)</sup>はつとをそむき、ゆうしよのさいけへかへらすハ、<sup>(編)</sup>いますむところのち<sup>(地頭)</sup>とう、くたんの百しやうともにもつて、<sup>(成敗)</sup>せいはいをくわふへきなり」とあり、百姓が他領の土地を耕作することを禁止し、この「法度」に違反すれば百姓も百姓居住地の地頭も処罰するとしており、『塵芥集』で定めた法令を「法度」と称している。

六角氏の『六角氏式目』<sup>15)</sup>は、家臣20人が合議して作成した法案を六角承禎（義賢）・義治父子が承認する形で制定されているが、承禎・義治父子の起請文前書に「国中法度今度定置旨、永不可有相違」とあり、また家臣20人の起請文前書には「御政道法度之事、得御諄、愚暗旨趣書立」とある。ここでも『六角氏式目』のことを「法度」と呼んでいる。

「法度」は、後述するように元来は中国の言葉である。日本における「法度」の用例は、平安時代にはすでにみられるものの、その数はあまり多くはない<sup>16)</sup>。鎌倉時代においても、北条泰時は編纂した『御成敗式目』について書状のなかで「式条」「式目」と書いており（北条泰時消息<sup>17)</sup>）、「法度」とは称していない。

「法度」の用例は室町時代に増加する。室町時代では寺院・神社中の法令

14) 注13)。

15) 注13)。

16) 東京大学史料編纂所のデータベース「古記録フルテキストデータベース」「平安遺文フルテキストデータベース」「鎌倉遺文フルテキストデータベース」等で「法度」を検索して参照。

17) 『中世法制史料集 第1巻鎌倉幕府法』〔附録二〕。

に「法度」が多くみられる<sup>18)</sup>。さらに戦国時代には、大名が単発で公布した法令にも「法度」がみられるようになる。戦国期の大名が公布した「法度」の早い例は、永正16年（1519）4月21日赤松義村光明寺法度写（「五峯山光明寺古証文写」）<sup>19)</sup>である。発給者の赤松義村は播磨国守護で、冒頭に「播州賀東郡光明寺法度条々」とあり、光明寺における禁止事項を5ヵ条掲げ、文末に「仍法度如件」とある。また、東国の場合として戦国大名北条氏の例を挙げると、天文23年（1554）7月12日北条氏船方法度写（「武州文書三府内下本芝式丁目内田源五郎蔵」）<sup>20)</sup>の冒頭に「船方中ニ置法度」とあり、武蔵国柴金曾木の船持ちに対して4ヵ条を定めている。

なお、『中世法制史料集』第4・5巻（武家家法Ⅱ・Ⅲ）<sup>21)</sup>に収集されている戦国期の大名たちの法令では、「法度」のほかに文書の冒頭部分に書かれている文書名として「定」「禁制」「掟」「制札」「条々」「条目」などがあり、これらが戦国期の大名が公布した法令を表わす言葉であった。

中国において「法度」は、古くは『荀子』性悪篇<sup>22)</sup>にみえ、性悪説を唱える荀子は「起礼義，制法度，以矯飾人之情性而正之」（礼儀を起し法度を定めて、人の本性を矯正・修飾して正す）としている。『荀子』は紀元前3世紀後半に成立した書で、少なくとも中国の戦国時代には「法度」は法律を意味していた。中国では法律を意味した言葉として「法」「法令」「法制」「法則」「法度」等があることが指摘されている<sup>23)</sup>。

明では、『明太祖実録』巻116の洪武10年（1377）11月是月に「夫法度者朝廷所以治天下也（それ法度は朝廷の天下を治むるゆえなり）」<sup>24)</sup>とあり、「法度」すなわち法律は洪武帝（朱元璋）の朝廷が天下を支配する方法

18) 東京大学史料編纂所のデータベース「日本古文書ユニオンカタログ」等参照。

19) 佐藤進一・百瀬今朝雄編『中世法制史料集 第4巻武家家法Ⅱ』第1部278号。

20) 『中世法制史料集 第4巻武家家法Ⅱ』第1部436号。

21) 注19)、佐藤進一・百瀬今朝雄編『中世法制史料集 第5巻武家家法Ⅲ』。

22) 藤井専英『新釈漢文大系第6巻 荀子（下）』。

23) 廣池千九郎「東洋法制史序論—東洋に於ける法律と云ふ語の意義の研究—」（同『東洋法制史研究』所収）。

24) 『明実録 附校勘記』「明太祖実録」巻116、4頁。

であるとしている。洪武帝は法律を重視し、民衆の武装蜂起や官吏の汚職に対して厳罰を定めた<sup>25)</sup>。

「法度」は明の一般民衆の間でも法律を意味する言葉として使われ、明代の白話小説『水滸伝』にも「法度」がみえる。『水滸伝』は、宋の時代に実際に山東に存在した宋江が率いる盗賊団の話が元であり、民間で語られてきた講釈や芝居が明代に口語文体で小説としてまとめられたもので、内容は明の社会を反映しているとされている<sup>26)</sup>。100回本『水滸伝』<sup>27)</sup>の第75回では、朝廷の蔡京太師が陳宗善に「到那里不要失了朝廷綱紀乱了国家法度」（あそこ〔梁山泊〕に着いたら朝廷の綱紀を誤ったり国家の法度を乱したりしてはいけない）と述べ、元盗賊団（梁山泊）を朝廷が招安（罪を許すこと）するために派遣する陳宗善に、梁山泊では国家の法律を破らないようにと念を押している。国家の法律は守るべきものであった。

このように、中国では「法度」は法律を意味し、明の国家は法律によって人民を支配する体制にあった。

日本では中世後期に「法度」の用例が増加して分国法の自称として用いられるに至ったのは、おそらく明の影響と思われるが、このことについてはまた別の機会に考えてみたい。

### Ⅲ. 明の法典と分国法の比較

分国法は、中国で法律を意味する言葉として用いられていた「法度」を自称したが、その内容・性質はどうであったのか、分国法の内容を中国の

25) 張晋藩他編著『中国法制史』第8章「明朝専制主義政治法律制度的高度發展」、栗勁他編著『中国法律思想史』第8章第1節「朱元璋」参照。

26) 『水滸伝』については、何心『水滸研究』、高島俊男『水滸伝の世界』、稲田篤信編『（アジア遊学131）水滸伝の衝撃—東アジアにおける言語接触と文化受容』等参照。拙稿「中国の星座と国家・民衆—『宋史』天文志と白話小説『水滸伝』—」では同書にみえる星について考察した。

27) 《古本小説集成》編委会編『李卓吾批評忠義水滸伝』を使用し、『完訳水滸伝』(一)～(十)（岩波文庫）を参照。

明の法典と比較することによって明らかにしてみたい。中国では、3世紀の魏と晋における律・令の法典編纂以来、王朝ごとに国家の法典が編纂された。明の法典としては、律・令の「明律」「明令」と、「大誥」「問刑条例」がある<sup>28)</sup>。

律・令は、太祖洪武帝（呉王朱元璋）が呉元年（1367）に編纂させ、翌年の洪武元年（1368）正月に頒行された。律・令は、周知のように、律は刑法で、令は行政法が中心である。「明律」はその後、同7年、同22年にも編纂・頒行され、同30年に改訂されて完成した。この洪武30年の「明律」は7編に分けられ460条ある。最初と同元年の律285条より条数が増加しているが、「唐律」の12編・500条（実数502条）<sup>29)</sup>には及んでいない。一方、「明令」は、洪武元年の令が6編で145条あり、その後改訂されなかった。開元25年（737）の「唐令」が1546条あった<sup>30)</sup>ことに比べれば、その10分の1にも満たない少なさである。

「大誥」は、明の官民の過犯の事例を集めて撰定したもので、人民に犯罪と刑罰に対する認識を普及させて犯罪者を減らすことが目的で作られた。洪武帝は、洪武18年に「御製大誥」（74条）、同19年3月に「大誥統編」（87条）、同年12月に「大誥三編」（43条）、同20年に「大誥武臣」（32条）を撰定して頒行させた。そして、同30年には「明律」（「大明律」）に「大明律誥」（36条）を付けて頒行した。これらの「大誥」は、『明史』刑法志<sup>31)</sup> 卷93によれば、学校や里の塾師に頒布して教えさせた。全国で「大誥」を講読して来朝した師・生徒は19万余人にのぼったという。

その後、「明律」に法令がない場合や、「明律」の法令が不適当なケースの判決の事例が集積されていき、これらの先例を集めて編纂したものが「問

28) 小口彦太他『中国法入門』第1部第1章「伝統中国の法」、佐藤邦憲「明律・明令と大誥および問刑条例」、楊一凡「洪武《大明律》考」、同「《大誥》考」、趙姍黎「《問刑条例》考」参照。

29) 八重津洋平「故唐律疏議」。

30) 池田温「唐令」。

31) 野口鐵郎編『訳註 明史刑法志』36頁。



刑条例」である。「問刑条例」は弘治13年（1500）に撰定され、その後、嘉靖29年（1550）、万暦13年（1585）に改訂され、明の裁判で「明律」を補充・修正する法典として用いられた。

これらの明の法典「明律」「明令」「大誥」「問刑条例」<sup>32)</sup>は、その内容の多くが刑法である。明の洪武帝は法律によって天下を支配するとしたが、その法律は刑法が主であった。中国では古代から刑法が発達し、刑罰を中軸とした権力的な統治の体系が構成されてきたことが指摘されている<sup>33)</sup>。盗賊たちが主人公の『水滸伝』にも、東平府などの府で彼らに対し背杖などの刑罰が厳しく執行され（役人に賄賂を渡して緩和されることもあったが）、地方の監獄に送られる、という場面が時々出てくる。

これら中国の刑法による支配は、アジアにおける君主の法による権力的な支配性を論じるときに、刑法のあり方が一つの指標となることを示しているのではないだろうか。つまり、法典中の刑法の数、刑罰の軽重が、法典を制定した君主の権力的な支配性を測る一つの基準になると考えられる。

そこで、分国法の制定者である戦国大名の法による支配性を明らかにする試みとして、分国法の刑法のあり方に着目してみた。表2は、検討が可能な7つの分国法を取り上げ<sup>34)</sup>、各法典中で処罰することが記されている条（具体的な刑罰を記している条は□で囲って示す）、処罰することを記した条の数・割合を一覧表化したものである。なお、咎人に関する内容であっても処罰することを明記していなければ含めなかった<sup>35)</sup>。

この表2によれば、分国法中で処罰を明記した法令（刑法）は全体的に少なく、どの分国法においてもその占める割合は半分以下である。また、これらの分国法の法令では、処罰することが記されているといっても、明

32) 『皇明制書』に「大明律」「大明令」、4種の大誥、「問刑条例」等を所載。

33) 仁井田陞『中国法制史 増訂版』52・74頁、福島正夫『中国の法と政治—中国法の歴史・現状と理論』4頁。

34) 『大内氏掟書』は単発の法令を集めたものであり、『相良氏法度』は条数が少なすぎ、『結城氏新法度』は条文に欠損部分があるため取り上げなかった。

35) 『六角氏式目』第62条等。

表2 分国法の処罰規定の条

分国法	総条数	処罰明記の条 (□内は量刑がみえる条)	処罰明記の条数(割合)
今川仮名目録	33	1・2・7・8・9・10・11・13・20・22・24・25	12 (36%)
仮名目録追加	21	1・4・5・6・8	5 (24%)
塵芥集	171	4・5・6・16・18・21・25・27・32・33・34・35・39・40・41・45・46・47・48・52・53・55・57・58・59・62・63・65・66・67・69・70・71・72・73・74・75・76・77・79・80・81・82・83・87・89・91・113・114・116・117・125・129・130・134・137・144・146・150・152・154・155・156・159・160・162・163・165・167・171	70 (41%)
甲州法度之次第	55	6・9・13・17・18・22・26・39・41・45	10 (18%)
六角氏式目	67	4・12・13・22・24・29・30・31・32・40・41・42・44・46・49・53・57	17 (25%)
新加制式	22	1・2・3・6・7・8・9・10・11・20・22	11 (50%)
長宗我部氏掟書	100	3・10・17・18・23・25・26・27・28・29・30・31・32・33・37・52・53・54・60・62・63・66・71・72・74・77・78・79・80・83・84・87・88・92・94・95・98	37 (37%)

の法典が具体的に笞・杖・徒・流・死の刑罰で量刑している（例えば「杖一百」）ことに比べ、具体的な刑罰を示している条文は少ない。分国法にみえる具体的な刑罰としては、過銭、所領・財産没収、追放、流罪、死罪がある。しかし、多くの処罰規定は、「罪過に処す」「成敗をなす」「成敗を加う」「成敗を行なう」等の文言で表現されており、具体的な刑罰を規定していない。日本の分国法は、刑法の占める割合が少なく、その上刑罰の内容を具体的に定めていない刑法が多い。分国法は、明の法典に比べれば、刑法・刑罰による支配は積極的には行なわれていなかったことがいえる。分国法が大名の支配のために作られた法典とする評価は、刑法のあり方からみる限り妥当であるとは思えない。

#### Ⅳ. 分国法制定の理由

分国法が支配のために制定されたのではないとすれば、一体何のために制定されたのであろうか。分国法制定の理由については、『今川仮名目録』と『結城氏新法度』に明記されている。

『今川仮名目録』<sup>36)</sup>の末尾では、この法典を制定した理由について次のように記している。

右条々、連々思当るにしたかひて、分国のため、ひそかにしるしをく  
所也。当時人々こさかしくなり、はからさる儀共相論之間、此条目を  
かまへ、兼てよりおとしつくる物也。しかれハひひきのそしり有へか  
らさる歟。如此之儀出来之時も、箱の中を取出、見合裁許あるへし。  
此外天下の法度、又私にも自先規の制止は、不及載之也。

これによれば、この法典は人々の訴訟に対処するために作成したもので、  
裁判の時の基準とし、依怙最良をした裁判であると言われたいめとして  
いる。今川氏親が分国法を制定した理由は、一定の法令に基づいた公平な  
裁判を行なうためであった。

さらに、結城政勝が制定した『結城氏新法度』<sup>37)</sup>の冒頭部分にも、これ  
と同様のことが書かれている。

(前略) 縁者・親類(沙汰)のさたの時、鷺をからす(鳥)ニ言たて、縁者・親類又  
(指南)しなん其外二たのもしかられへきかくこにて候哉。とても死得間敷ニ、  
目つくり、刀つきにて、無理を言たて、おほからぬ(傍輩)ほうはい間にて、  
にあハぬさんとうの刷、わけ候モなつきお□□候。然間私法度をあけ  
候。各可被心得候。(後略)

政勝は親類・縁者の裁判で、鷺を鳥だと言い張るような彼らに無理を言  
われ脅かされて困ったのでこの法度を作ったとしている。『結城氏新法度』  
も、親類・縁者だからといって依怙最良をしない公正な裁判を行なうこと  
を制定の目的としていたことがわかる。

また、『塵芥集』では、末尾に付けられた伊達家重臣12人の起請文で「評  
定之理非決断事」として『御成敗式目』の起請文を引用し、裁判の時は公  
正・率直に意見を述べるべきで、評定衆が訴訟人・縁者に加担をする行為  
を否定している。そして、『御成敗式目』の起請文にはない内容の文を加

36) 注13)。

37) 注13)。

え、伊達家への直奏の時に評定衆が片方を最良することは法令を破ることであり、また、非分の人と理運の人を正しく見極めて判断しなければ正義を曲げることになるとしている。この『塵芥集』独自の部分は、おそらくこれまでの伊達家の裁判で実際にみられた不正行為について具体的に述べたものであり、評定衆たちは今後このような不正な裁判を行なわないことを起請文の形で誓っている<sup>38)</sup>。

六角氏の場合では、逆に家臣たちから公正さを要求されている。『六角氏式目』の制定には2つの事件が背景にあるとされており、1つは六角義治が家臣後藤氏を殺害したことにより家臣たちが北の浅井長政と手を結んで六角氏の観音寺城を攻めた観音寺騒動で、もう1つは家臣進藤賢盛が六角承禎に直訴して後藤氏が進藤氏から借金をした時の担保安国寺を質流れにさせることを承禎に承認させた安国寺質流れの相論である<sup>39)</sup>。これらの事件によって家臣たちは六角氏の独断・独裁に危機感を抱き、さらにはこの六角氏領国の不安定さが浅井氏の侵攻を招く事態に発展するため、法の制定によって領国内を安定させる必要があった。特に、六角氏の独裁の阻止は重要な課題であった。

『六角氏式目』第37条には、

一、不被遂御糺明、一方向不可被成御判并奉書事。

とあり、六角氏が裁判の審理を行なわないで一方向的に判物や奉書を付与することを禁じている。また、第38条では、

一、御代々於御判・奉書等之証文者、不可被棄破之、并江雲寺殿御成敗不可被改之。但為非拋儀、不可被引用後例事。

として、代々の六角氏から付与された判物・奉書を反古にすることや、六

38) 起請文の『塵芥集』独自の部分について、小林宏『伊達家塵芥集の研究』第3編「塵芥集の構造的特質」104頁では、伊達植宗の強力なリーダーシップの下に自ら式目に代るべき新法典を意欲的に制定するという体裁をとっているとしている。一方、『仙台市史 通史編2 古代中世』381頁では、『塵芥集』が地頭層でもある家臣12人の要求をふまえて制定されたという見方をしている。

39) 木村靖「六角氏式目制定の目的と背景」、『新修大津市史3 近世前期』第1章第1節「六角氏の領国支配」、今岡典和「六角氏式目の歴史的位罫」参照。

角定頼（江雲寺殿。承禎の父）の判決を改めたりすることを禁じている。これも六角承禎・義治による勝手な改変を防ぐための法である。六角承禎・義治も、起請文前書の中で「御沙汰可為憲法上者、於及訴論子細者、或就親近之浅深令鼂眞、或依奏者之好惡致偏頗儀、不可在之、任道理之旨、対万民如順路可加成敗事」と誓っており、裁判は公正（「憲法」）であるべきで、鼂眞・偏頗をせずに道理に従って判決を出すとしている。

『六角氏式目』は、2つの事件にみられた六角氏の独裁に対する批判・反省から、公正な裁判を行なって家臣たちの權益を守るために作成されたといえる。

分国法制定の目的は、依怙鼂眞や恣意的な判断による不正な判決を防止して公正な裁判を行なうことであったことが指摘できる。分国法は公正な判決の拠り所となる法律として制定されたのである。

## V. 分国法の独自性

各分国法の内容にはそれぞれに独自性があり、分国法制定の理由と関係すると思われる。ここでは伊達植宗制定の『塵芥集』と武田晴信（信玄）制定の『甲州法度之次第』を取り上げ、その独自性について考察する。

### 1. 『塵芥集』

『塵芥集』は、文字がほとんど仮名で書かれており、ほかの分国法が漢文を用いていることと照らし合わせると（表3）、独自の特色をなしている。おそらく漢字が読めないレベルの人々（下級武士・庶民等）にも広く読ませるために仮名字で書かれたのであろう。なお、『今川仮名目録』は法典名に「仮名」と記されているが、その文体は、前節で引用して示したように、仮名字と漢文が入り混じった形である。『日葡辞書』<sup>40)</sup>には、「仮名に言

40) 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳 日葡辞書』。

表3 分国法の文字・文体

分国法	制定者	使用の文字・文体
相良氏法度	相良為続	仮名・漢文の混合
	相良長毎	仮名・漢文の混合
	相良晴広	仮名・漢文の混合
今川仮名目録	今川氏親	仮名・漢文の混合
仮名目録追加	今川義元	仮名・漢文の混合
塵芥集	伊達植宗	仮名
甲州法度之次第	武田晴信	漢文
結城氏新法度	結城政勝	仮名・漢文の混合
六角氏式目	六角義賢・義治	漢文
新加制式	三好氏	漢文
長宗我部氏掟書	長宗我部元親・盛親	漢文

う」の意味として、皆の人がわかるようにやさしく話すとあり、『今川仮名目録』の「仮名」も、人々にわかりやすく書いたという意味である可能性が高い。

『塵芥集』の171条の内容は、ほかの分国法が条数が少なく内容に偏りがあるのに比べ、刑事・民事等幅広く多岐に渡っており、総合的な法典といえる。なかでも刑法が多いこと（70条）について、小林宏氏は伊達氏の刑事裁判・刑罰権の一元的掌握への志向を指摘している<sup>41)</sup>。

刑法では、ほかの分国法とは異なった判断を下している条文がいくつもある。具体例を挙げると、喧嘩に対する処罰規定としては『今川仮名目録』第8条の喧嘩両成敗が有名であるが、この今川氏親が大永6年（1526）に発布した法典より10年後に作られた『塵芥集』第38条には、

一、<sup>(喧嘩)</sup>けんくわ・<sup>(口論)</sup>こうろんにより人をきる事ハ、<sup>(手負)</sup>ておい<sup>(多)</sup>おほきかたの<sup>(理)</sup>り  
<sup>(運)</sup>うんたるへし。たゝしておい・<sup>(死人)</sup>しにんおほくとも、かゝり候ハ、  
 かゝりての<sup>(越度)</sup>をつとたるへき也。

とある。つまり、喧嘩・口論では負傷の多い方に道理があるが、先に仕掛けた場合はその者の方が悪いとしており、両成敗ではない。また、その処

41) 小林宏『伊達家塵芥集の研究』第3編第3章「その刑事規定」。

罰については具体的には規定しておらず、単に「理運」あるいは「越度」(落度)と記しているだけである。これらは『今川仮名目録』との関係が見出せない内容である。

また、第27条は、勝手に別の主人に仕えた被官人に関する条文である。

一、人のひくわん、本<sup>(被官)</sup>しうにん<sup>(主人)</sup>をすて、あらためしうをとる事あらは、  
いまめしつかふしうにんのかたへ申と、け候うへ、なを<sup>(抑留)</sup>よくりうい  
たし、本しうにんへかへさす候ハ、一<sup>(半)</sup>ひつをとり、見あひにこれ  
をうつへし。もし又ふミの返事にもをよはすハ、<sup>(子細)</sup>しさいをひろうす  
へし。其是非により、くたんのひくはん、ならひにきよ<sup>(許容)</sup>ういたし  
候やから、ともにもつてせいはい<sup>(成敗)</sup>をくわふへきなり。

本主人を捨てて別の主人に仕えた被官人については、現在の主人に申し届けてもその被官人を返さない場合は、一文を書かせて、その被官人を見つけ次第に討て、とある。また、現在の主人が返書もよこさなければ伊達氏に訴えよ、裁判によって被官人と現在の主人を処罰する、ともしている。

主人を勝手に変えた被官人については、『甲州法度之次第』(55箇条本)<sup>42)</sup>第15条では、別の主人に仕えた譜代の被官人は、現在の主人に断ってから受け取れ、もし現在の主人が承知の上で逃げた場合は代わりの1人を弁償させよ、としている。逃げた百姓あるいは被官人を現在の主人に断ってから連れ戻せとする法令(人返令)は、武田氏・北条氏の発給文書に多く見られ、広範囲の地域社会での慣習法でもあった<sup>43)</sup>。これに対し、『塵芥集』第27条では、現主人が返さない場合には、見つけ次第被官人を討つこと、さらには伊達氏に訴えることも定めており、慣習法とは異なった厳しい処分内容になっている。

このほかにも、刑事事件の証人かつ容疑者でもある「生口」についての規定があり(第41・50・51条)、この「生口」の規定はほかの分国法にはみられない『塵芥集』独自の刑事訴訟法である。

42) 『中世法制史料集 第3巻武家家法Ⅰ』。

43) 拙稿「戦国大名と「国法」―武田・北条氏領国の場合―」で論述。

また、家族法についても『塵芥集』には独自性がみられる。女子への所領譲与については、中世後期に一期知行が慣習法となり<sup>44)</sup>、戦国期においても、石山本願寺証如の『天文日記』<sup>45)</sup> 天文6年(1537)4月28日条に「町野祖父女子為譲扶助候処ニ、(中略)女子死去候者、即町野へ返付大法候間」とあり、女子の死後は実家の町野家に所領を返すこと(一期知行)が「大法」、すなわち慣習法であるとしている。しかし、『塵芥集』第104条では、女子への所領譲与について、「<sup>(女子)</sup>によしゆつりの<sup>(所 帯)</sup>のしよたいの事、そのおやのかきわけまかせたるへきなり」として、親の譲状に任せるとしている。『六角氏式目』の場合は第48条で、「粧田」(女子に譲る所領)については「約諾の文書」(譲状)に任せるとしながらも、文書がなければ一期の後に生家に返せとしており、慣習法である一期知行も条文に取り入れている。慣習法である女子の一期知行を取り入れずに親の譲状に任せるとした『塵芥集』第104条は、親権が強いといえる。

勝俣鎮夫・藤木久志両氏<sup>46)</sup>は、在地社会の法・慣習を戦国大名が吸収して法令化したことを指摘している。『塵芥集』の場合、ほかの分国法とは異なっており慣習法の影響が少ない傾向にあり、制定者伊達氏の意向を強く反映させた法典と考えられる。仮名文字で書かれているのも、伊達氏独特の法を領国民に広く知らしめる目的があったためではないだろうか。

## 2. 『甲州法度之次第』

『甲州法度之次第』は、13ヵ条が『今川仮名目録』を継受して作られたとされている<sup>47)</sup>。しかし、勝俣鎮夫氏<sup>48)</sup>は、武田家の支配体制に適合するように修正が加えられているものも多いことを指摘している。この13条の内

44) 拙稿「中世後期における相続と家族法」。一期知行とは、所領を生きている間だけ領有して死後は実家に返すことである。なお中世では財産は各個人で所有し、夫婦別財の傾向にあった(拙著『中世の武家と公家の「家」』)。

45) 『石山本願寺日記 上巻』。

46) 注1)の勝俣著論文、藤木久志「大名領国制論」(同『戦国大名の権力構造』)。

47) 木島誠三「塵芥集に就て」、『中世法制史料集 第3巻武家家法Ⅰ』『解題』。

48) 勝俣鎮夫「戦国の家法と家訓」(同『中世社会の基層をさぐる』)。



表4 『今川仮名目録』と『甲州法度之次第』（55箇条本）の相違点

事項	『今川仮名目録』〔条〕	『甲州法度之次第』〔条〕
名田を取り放つ事	〔1〕本百姓に尋ねた上で年貢増の人に付ける	〔7〕
山野の相論	〔2〕新儀の人に道理なければ所領3分の1没収	〔8〕
知行分（恩地）の売却	〔13〕勝手に行なった人は罪科	〔12〕
河流れの木	〔27〕	〔21〕橋はもとの所へ返す
召仕仕う者（奴婢雑人）の逃亡	〔6〕20余年以後は取り戻せない	〔15〕10年以後は取り戻せない
出仕の座席	〔32〕勸進猿蓑・田蓑・曲舞の時	〔23〕
喧嘩両成敗	〔8〕合力した者の負傷・死亡は取り扱わない	〔17〕合力した者は成敗
被官人の喧嘩・盗賊	〔10〕逃亡させた主人の所領1ヵ所を没収	〔18〕逃亡させた主人の所領3分の1を没収
童部の諍いに親が鬱憤を致す	〔11〕父子ともに成敗	〔25〕父に対し世間として誠め
童部が誤って友を殺害	〔12〕15歳以後は罪か	〔26〕13歳以後は罪
相論途中の狼藉	〔4〕敗訴。しかし3年後に裁判を再開	〔24〕敗訴。論所を敵人に付ける
他国人	〔30〕婚姻を禁止	〔4〕婚姻・所領・被官を禁止
宗論	〔28〕諸宗を禁止	〔22〕浄土宗と日蓮宗を禁止

容を詳細に検討してみると、すべての条文で『今川仮名目録』の内容を改変している。この13条について、両法典の相違点を表4に示す。

『今川仮名目録』第1条は地頭が名田を正当な理由なしに没収することを禁止したもので、条文の後半部分では、もし名田の年貢を増やして納めるという百姓がほかにいれば、本来の百姓にそれと同じ増分を納めるかどうかを尋ね、そのつもりがなければ増分を納める方の百姓に名田を与えよ、としており、利益を優先している。しかし、『甲州法度之次第』（55箇条本）第7条にはこの後半部分がない。義理よりも利益を優先する『今川仮名目録』の姿勢は、武田晴信の政治理念に合わなかったと思われる。儒学の『論語』では利益優先を批判しており<sup>49)</sup>、儒学の影響を強く受けていた晴信は<sup>50)</sup>、利益よりも義理を重んじたと考えられる。

49)『論語』里仁篇12には「子曰、放於利而行、多怨」（子の曰わく、利によりて行なえば、怨み多し）、同篇16には「子曰、君子喻於義、小人喻於利」（子の曰わく、君子は義に喻り、小人は利に喻る）とある（金谷治訳注『論語』岩波文庫）。

喧嘩両成敗の法の場合、両者の大きな違いは、喧嘩に合力した者について、『今川仮名目録』第8条では合力した者が負傷・死亡しても（訴訟として）取り扱わないとしているが、『甲州法度之次第』第17条では合力した者も成敗するとしている。これは、蔵持重裕氏<sup>51)</sup>が喧嘩両成敗法のねらいとして合力による紛争の拡大を規制・抑制・禁止することがあったと指摘しているように、『甲州法度之次第』では喧嘩への合力が紛争を拡大させることを恐れたため処罰を明記したと考えられる。また、喧嘩をしかけられても我慢をした者については、『今川仮名目録』は理運があるとしているだけであるが、『甲州法度之次第』では無罪としており、合力者への処罰と同様に刑罰の有無を明確に規定している。

このほか、『甲州法度之次第』の特徴的な法として、棟別銭に関する法がある<sup>52)</sup>。棟別銭関係の法は6ヵ条あり、賦課関係の法8ヵ条の4分の3を占めている。これは、甲斐国は山が多く田畠が少ないため、家屋に課す棟別銭が重要な税となり、棟別銭の徴収に関するトラブルが多発して規定が必要になったためと考えられる。

『甲州法度之次第』は、『今川仮名目録』を参考にして作成されているが、その内容は武田晴信の政治姿勢や領国特有の事情を反映させた独自の法典になっている。

## Ⅵ. おわりに

戦国大名の分国法では、多くが自らの法令を「法度」と自称している。「法度」は中国では古代から法律を意味する言葉であり、日本の戦国時代と

50) 足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』第3編第11章第25節「武田氏」、拙著『占いと中世人一政治・学問・合戦』第5章1「武田信玄と占い」。

51) 蔵持重裕「紛争の解決と階級関係」。

52) 甲斐武田氏の棟別銭については、柴辻俊六『戦国大名領の研究—甲斐武田氏領の展開—』、同『戦国大名武田氏領の支配構造』、笹本正治『戦国大名武田氏の研究』、平山優『戦国大名領国の基礎構造』、勝俣鎮夫「戦国の家法と家訓」〔注48〕、鈴木将典「武田氏領国の税制」等多くの論考がある。

同時代の明においても同様であった。明の皇帝は「法度」を支配の手段とし、刑法を中心とした法典を制定・頒行して刑罰による人民支配を行なった。これに対し、日本の分国法では刑法が少なく、刑罰の内容もあまり具体的には明記されておらず、分国法の刑法による権力的な支配性は希薄であった。明の法典と日本の分国法は、同じ「法度」を称しながらもその性質は大きく異なっていた。戦国大名は、領国において法による権力的な支配を確立するための手段として分国法を制定したのではない。

いくつかの分国法には、臆畏や恣意的な判断による不正な裁決を防ぐために制定したことが明記されている。また、分国法は、制定した大名の政治姿勢やその領国特有の事情によりそれぞれに独自の内容を有している。戦国大名は、領国内で発生した問題・紛争に対する裁判の判決の基準にするために、その大名の思想・政策や領国特有の事情に適合した分国法を制定したのであり、権力的な支配を行なうためではない。戦国大名の分国法制定の目的は、領国内の問題や紛争を公正で適正な方法で解決することであり、公正な裁判を行なうことが最大の目的であったといえる。

#### 〈参考文献〉

『石山本願寺日記 上巻』清文堂出版、復刻版1966年

『完訳水滸伝』(一)～(十)(岩波文庫)吉川幸次郎・清水茂訳、岩波書店、2009～10年

『皇明制書』上・下、古典研究会、1966～67年

『中世政治社会思想 上』(日本思想大系21)岩波書店、1972年

『明実録 附校勘記』(胡適題)中央研究院歴史語言研究所校印、1966～68年

『論語』(岩波文庫)金谷治訳注、岩波書店、2002年

《古本小説集成》編委会編『李卓吾批評忠義水滸伝』上海古籍出版社、1990年

佐藤進一・池内義資編『中世法制史料集 第1巻鎌倉幕府法』岩波書店、1955年

佐藤進一・池内義資・百瀬今朝雄編『中世法制史料集 第3巻武家家法Ⅰ』岩波書店、1965年

佐藤進一・百瀬今朝雄編『中世法制史料集 第4巻武家家法Ⅱ』岩波書店、1998年

佐藤進一・百瀬今朝雄編『中世法制史料集 第5巻武家家法Ⅲ』岩波書店、2001年

- 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳 日葡辞書』岩波書店, 1980年  
野口鐵郎編『訳註 明史刑法志』風響社, 2001年  
藤井専英『新釈漢文大系第6巻 荀子(下)』明治書院, 1969年
- 『新修大津市史3 近世前期』大津市役所, 1980年  
『仙台市史 通史編2 古代中世』仙台市, 2000年  
『日本国語大辞典 第2版 第11巻』小学館, 2001年  
浅古弘・伊藤孝夫・植田信廣・神保文夫編『日本法制史』青林書院, 2010年  
稲田篤信編『(アジア遊学131) 水滸伝の衝撃—東アジアにおける言語接触と文化受容』勉誠出版, 2010年  
小口彦太・本間正道・田中信行・國谷知史『中国法入門』三省堂, 1991年  
滋賀秀三編『中国法制史—基本資料の研究』東京大学出版会, 1993年  
張晋藩・張希坡・曾憲義編著『中国法制史 第1巻』中国人民大学出版社〔北京〕, 1981年  
水林彪・天津透・新田一郎・大藤修編『新体系日本史2 法社会史』山川出版社, 2001年  
楊一凡主編『中国法制史考証 甲編第6巻 歴代法制考・明代法制考』中国社会科学出版社〔北京〕, 2003年  
栗勁・孔慶明・趙國斌・劉富超編著『中国法律思想史』黑龍江人民出版社〔哈爾濱〕, 1983年  
足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』日本古典全集刊行会, 1932年, 復刻版 有明書房, 1970年  
池享『戦国期の地域社会と権力』吉川弘文館, 2010年  
池田温「唐令」(滋賀秀三編『中国法制史—基本資料の研究』〔前掲〕)  
今岡典和「六角氏式目の歴史的位罫」(有光友学編『戦国期権力と地域社会』吉川弘文館, 1986年)  
笠松宏至『日本中世法史論』東京大学出版会, 1979年  
何心『水滸研究』古典文学出版社〔上海〕, 1957年  
勝俣鎮夫『戦国法成立史論』東京大学出版会, 1979年  
勝俣鎮夫『中世社会の基層をさぐる』山川出版社, 2011年  
河合正治『中世武家社会の研究』吉川弘文館, 1973年  
河野恵一「「分国法」の比較研究」(『歴史読本』2010年12月号)  
木島誠三「塵芥集に就て」(『歴史と地理』27—6, 1931年)  
木村靖「六角氏式目制定の目的と背景」(『鷹陵史学』1, 1975年)  
蔵持重裕「紛争の解決と階級関係」(同編『中世の紛争と地域社会』岩田書院,

2009年)。

小林宏『伊達家塵芥集の研究』創文社, 1970年

笹本正治『戦国大名武田氏の研究』思文閣出版, 1993年

佐藤邦憲「明律・明令と大誥および問刑条例」(滋賀秀三編『中国法制史—基本資料の研究』〔前掲〕)

柴辻俊六『戦国大名領の研究—甲斐武田氏領の展開—』名著出版, 1981年

柴辻俊六『戦国大名武田氏領の支配構造』名著出版, 1991年

菅原正子「中世後期における相続と家族法」(『日本歴史』697, 2006年)

菅原正子「戦国大名と「国法」—武田・北条氏領国の場合—」(『武田氏研究』36, 2007年)

菅原正子『中世の武家と公家の「家」』吉川弘文館, 2007年

菅原正子「武田信玄領国の法体系」(柴辻俊六編『新編武田信玄のすべて』新人物往来社, 2008年)

菅原正子『占いと中世人—政治・学問・合戦』(講談社現代新書)講談社, 2011年

菅原正子「中国の星座と国家・民衆—『宋史』天文志と白話小説『水滸伝』—」(『日本社会史研究』100, 2012年)

鈴木将典「武田氏領国の税制」(柴辻俊六編『新編武田信玄のすべて』〔前掲〕)

高島俊男『水滸伝の世界』(ちくま文庫)筑摩書房, 2001年

趙姍黎「《問刑条例》考」(楊一凡主編『中国法制史考証 甲編第6巻 歴代法制考・明代法制考』〔前掲〕)

中田薫「大法」(同『法制史論集 第3巻下』岩波書店, 1943年, 第4刷1994年)

仁井田陞『中国法制史 増訂版』(岩波全書)岩波書店, 1965年

平山優『戦国大名領国の基礎構造』校倉書房, 1999年

廣池千九郎『東洋法制史研究』創文社, 1983年

福島正夫『中国の法と政治—中国法の歴史・現状と理論』日本評論社, 1966年

藤木久志『戦国社会史論』東京大学出版会, 1974年

藤木久志『戦国大名の権力構造』吉川弘文館, 1987年

八重津洋平「故唐律疏議」(滋賀秀三編『中国法制史—基本資料の研究』〔前掲〕)

楊一凡「洪武《大明律》考」(楊一凡主編『中国法制史考証 甲編第6巻 歴代法制考・明代法制考』〔前掲〕)

楊一凡「《大誥》考」(楊一凡主編『中国法制史考証 甲編第6巻 歴代法制考・明代法制考』〔前掲〕)

“Hatto”, the Bunkoku Code of the Sengoku-Daimyo in Japan:  
Compared to the Codes of China

Masako SUGAWARA

《Abstract》

This paper attempts to reconsider the established theory that the Bunkoku (Province) code of the Sengoku-Daimyo (warring lord) in Japan was enacted for the purpose of dominating the local population. Investigating the 10 Bunkoku codes that have been handed down, the majority call themselves “Hatto(法度)”, which meant law in China. Although the Ming dynasty in China, which existed at the same time as the Sengoku period in Japan, governed people by means of criminal law and punishments, the Bunkoku code does not contain many criminal laws; they amount to half or less than half of all the laws. In addition, concrete punishments are hardly ever specified. This suggests that the Bunkoku code did not wield so much power over people.

Some Bunkoku codes clearly describe their purpose as being to prevent favoritism and arbitrary rulings in court. The nature of each Bunkoku code is more or less peculiar to the specific Sengoku-Daimyo and his province, and this also seems to be one of the reasons why a Daimyo chose to enact his own code. The Bunkoku codes were enacted to give fair and fitting rulings in court. In particular, the provision of a fair trial was their most important aim.